

「世界」とは何だろうか。「娑婆世界」や「安養浄土」、「安楽浄土」といった言葉に示されるように、親鸞が「無量寿経」から引く最後の銘文は「世界」を語り、その転換を語るものである。

「世界」とは第一に、私たちがそこに「ある」、その場所である。生まれることで世界が現れ、死ぬことで世界から離れるのだから、世界は私たち自身の「生」と「死」を契機として成り立っている。私たちは世界に生まれ、世界に死ぬのであり、生きるとは世界を生きているのである。この意味で世界は、「私たち自身が生きてある」ということを映し出す。「世界」と「私」は別ではない。

ここで大切なことは、親鸞はこの文を「教行信証」「信巻」に引用しているということだ。つまり、「娑婆」から「浄土」へと表現される世界の転換は、信心において起るのである。文字どおり「死ぬ」のでも、どこか別の理想的世界に生まれ変わるのでもない。転換とは「信」において生じるころの、私たち自身の存在の転換である。私たちの存在が反映された「世界」全体の意味が変わる。「浄土に生まれよ」との呼びかけは、「お前は本当に生きているのか、本当に生まれていると言えるのか」と問いかけている。

（元研究員 内記 洸）

『尊号真像銘文』試訳 ⑧

現代語

「必得超絶去 往生安養国」というのは、「必」は、かならず、ということ。かならずというのは、確かに定まったということであり、また「自然である」ということです。

「得」は、すでに得たのだ、ということ、「超」は、超えて、ということ、「絶」は、断ち切り、捨て去り、遠く離れる、ということ、「去」は、捨てる、往く、去る、ということ。息苦しさや虚しさを抱えながら生きていくしかない、私たち自身の「この世界」を断ち切って、途切れるはずのない「苦しみの連鎖」を遠く超え離れて行き去る、ということ。つまり、「往生安養国」——私たち自身の生きざまが根本からひっくり返されて、「安養浄土」という世界に新しく生まれ往くことは間違いない、ということです。この「安養」とは、私たち一人ひとりが直面しているこの暗闇の世界に「明るさ」と「開け」をもたらしてくれる、「阿弥陀如来」という存在をほめたたえる言葉なのでしょう。つまりこの言葉は、阿弥陀の願いがかたちとなった、「安楽浄土」と呼ばれる世界のことを言っているのです。

（訳…親鸞仏教センター）

原文

また言わく、「必得超絶去 往生安養国 横截五悪趣 悪趣自然閑 昇道無窮極 易往而無人 其国不逆違 自然之所牽」（大経）抄出

「必得超絶去 往生安楽国」というのは、必はかならずという。かならずというはさだまりぬというところなり。また自然というところなり。得はえたりという。超はこえてという。絶はたちすてはなる、という。去はすつという、ゆくという、さるといなり。娑婆世界をたちすてて、流転生死をこえはなれてゆきさるといなり。安養浄土に往生をうべしとなり。安養というは弥陀をほめたてまつるみこととみえたり。すなわち安楽浄土なり。

（『真宗聖典』五一四頁）

参考

（頁はすべて『真宗聖典』）

◆「必」——かならず さだまりぬ 自然

・「必得往生」と言うは、不退の位に至ることを獲ることを彰すなり。「経」（大経）には「即得」と言えり、「釈」（易行品）には「必定」と云えり。「即」の言は、願力を聞くに由つて、報土の真因決定する時刻の極便を光顯せるなり。「必」の言は、密（あきらかなり）なり、然（たしか）なり、分極なり、金剛心成就の貌なり。

（二七八頁「教行信証」「行巻」）

・弥陀仏の本願を憶念すれば、自然に即の時、必定に入る。

（二〇五頁同「正信偈」）

・「即得往生」というは、「即」はすなわちという、ときをへず、日をもへだてぬなり。また即は、つくという。そのくらいにさだまりつくことばなり。「得」は、うべきことをえたりという。真実信心をうれば、すなわち、無碍光仏の御ころのうちに撰取して、すてたまわさるなり。「撰」は、おさめたまう、「取」は、

むかえとると、もうすなり。おさめとりたまうとき、すなわち、とき・日をもへだてず、正定聚のくらいにつきさだまるを、往生をうとはたまえるなり。しかれば、「必至滅度」の誓願を、「大経」にときたまわく、……（五三五頁「一念多念文意」）

◆絶——たちすてはなる

・「断」と言うは、往相の一心を發起するがゆえに、生として当に受くべき生なし。趣としてまた到るべき趣なし。すでに六趣・四生、因亡じ果滅す。かるがゆえにすなわち頓に三有の生死を断絶す。かるがゆえに「断」と曰うなり。「四流」は、すなわち四暴流なり。また生・老・病・死なり。（二四四頁「教行信証」「信巻」）

◆娑婆世界をたちすてて、流転生死をこえはなれてゆきさる

・もろもろの行者に白さく、凡夫生死、食して厭わさるべからず。弥陀の浄土、軽めて欣わさるべからず。厭えばすなわち娑婆水く隔つ、欣えばすなわち浄土に常に居せり。隔つればすなわち六道の因亡じ、輪廻の果自ずから滅す。因果すでに亡じてすなわち形と名と頓に絶うるをや。（二四四頁同「信巻」「般若論」）